

大東アレル帳

(18)

日輪燃ゆ

懐中電灯の小さな明かりをたよりに、飯盛山頂をめざし人の列が続く。

人それぞれの人生があるごとく、登山口は千差万別である。

ユックリズムの人々は、野崎口、谷間の滝街道より、マイカー族は阪奈道路から、性急組は、最短距離の巖神社から尾根道をたどる。

「ホイ」「ホイ」と奇声を挙げ、スニーカーのかかとを踏みつぶした足元の若者たちの集団が、狭く険しい起伏の登山道を巧みに駆けて行く。

熟年層の人々は、急がず、焦らず、飯盛城の岩跡の平坦地に到着すると汗をぬぐい小休止、黙々と時間

をかけて歩む。

空に高く青くきらめく星、遠く西の彼方に広がる広大な暗黒の大阪平野に小さく、あるいは大きく、色とりどりの街の灯が星くずのように輝く。

「ワーきれい」と、異口同音に下界の風物にしばし歩みを忘れる登山者の群、来る年ごとの始めに暗夜行路をゆく人々が体験するだいご味である。

昭和も四十年代の始め、山頂に総勢二百人たらずの人出が、その後、近くで日の出の拝める山と、マスコミ紙上に報道されて以来、年ごとに近郊、近在の登山者が増え、だれいとうなく飯盛銀座と呼ぶ人出でにぎわう。

町内会、ボーイスカウト

分団、子供会などの団体も多く、「ここ数年、紅白歌合戦をみたことがない」とリーダーは、大みそかの夜、頂上付近に野営テントの設置に余念なく、集団で祝う元朝の豚汁の雑煮の準備にいとむ。

備にいとむ。

暗夜登山に備え十二月中旬旬より縄とびレッスンをを行い、安全を期する子供会もあるとき。

今は、万葉秀歌に詠まれた「神さぶる生駒高嶺」に昇る壮大な日輪のショーを観んものと人々が群集する。

古代より、朝に夕べに五穀の豊穰を太陽神に祈りつづけた百姓（オオミタカラ）たちの風習が、時の流れとともにいつのころから薄れていったのか、すぎし戦国の昔、ここに居城を構えた武將たちは、昇る日輪にどのような願いをこめて新春の祈りを捧げていたのだろうか。

空に、彼（か）は誰（たれ）星「明けの明星」が、ひとときわ輝き、彼は誰時の薄明を告げ、ゆるやかに東の空に白夜のごとく白味がさし、山肌と人々の全貌を静かに、静かに浮かびあがらせる。

やがて、方位の辰己に当たる東南の空を朱色に染め、ゆつくりと陽が昇りはじめ、山頂の群衆の顔、人々を、あかあかと照らしながら緋色（ひいろ）に燃えかがやき日輪のご来光である。

かしわでを打ち、何ごとかを祈る人、思わず万歳を叫ぶタウンスタイルの若人たちの集団、「来てよかった、見事やなア」と喜びあう親子連れの人。人、それぞれの新しき年への出発が山頂より始まる。

文・今村安和



元日の日の出時刻午前7時5分ごろ
(飯盛山頂付近)